

CWA NEWS



千葉県友好使節団

第2回!

ウィスコンシン州へ!

千葉ウィスコンシン協会の設立以来、2回目の派遣となる「千葉県友好使節団」(団員 22 名、団長:銚子はね太鼓保存会 宮崎義政会長)が、平成 19 年 10 月 5 日(金)から 13 日(土)までの日程でウィスコンシン州を訪問しました。今回の使節団には、「文化・芸術」、「学術・教育」「バイオマス」といったこれまでの交流分野に加え、新たに「精神科医療」の関係者が加わりました。

現地では、『インディアンサマー』と呼ばれる快晴に恵まれ、内容の濃いスケジュールもすべて予定通りに行うことができました。使節団は、マディソン市を中心に、それぞれの分野で文化公演や視察、訪問等を行い、交流を深めました。

今回の友好使節団の派遣を通して、千葉県とウィスコンシン州がこれまで以上に親密になり、多くの交流の成果を得られたことは本当に嬉しい限りです。また、今回の派遣のお世話をいただいたジョージ・ツグロス委員長はじめウィスコンシン千葉委員会の方々、心のこもったおもてなしをいただいたホストファミリーの方々、そして各グループの交流をお手伝いいただいた方々には心より感謝申し上げます。

今後も両県州の交流がさらに発展するよう努めてまいります。



文化・芸術分野の交流

今回は、ウイスコンシン千葉委員会のご尽力により、ファーマーズマーケットの屋外ステージ、小中学校、大学の劇場、フォークローヴィレッジ(民俗資料館)と、さまざまな公演場所を用意していただきました。また、地元のTV番組にも出演し、ローカル新聞にも大きく取り上げていただきました。

特に、マディソン地域工科大学では、パーカッションクラスでの講義が企画され、日本の伝統的太鼓や「銚子はね太鼓」の歴史について学生に説明する機会を得ました。パフォーマンスだけでなく、時間をかけて日本文化について説明するのは初めてのことであり、今後の文化交流のヒントにもなりました。

メンバーの中には小学生や高校生も参加しており、若い演奏者達にとって今回の経験は、これからの人生に多大な影響を及ぼすものと思います。好天気にも恵まれ、最高の7日間でした。

(事務局:青木靖子)

文化グループ

宮崎 義政	千葉県太鼓連盟会長 銚子はね太鼓保存会会長
長谷川 勇	銚子はね太鼓保存会
越川 昭一	千葉県太鼓連盟事務局長 銚子はね太鼓保存会事務局長
三浦 一泰	銚子はね太鼓保存会
永井 拓己	銚子はね太鼓保存会 (高校2年生)
佐々木 裕輔	銚子はね太鼓保存会 (中学1年生)
山口 葵	銚子はね太鼓保存会
宮内 寧々	銚子はね太鼓保存会 (中学2年生)
高安恵里佳	銚子はね太鼓保存会 (中学2年生)
三浦 英	銚子はね太鼓保存会 (小学4年生)
青木 靖子	千葉ウイスコンシン協会

主な公演先

- 10/6(土) ☆ファーマーズマーケット
(マディソン子供博物館の屋外ステージ)
- 10/8(月) ☆チェロキー中学校
☆オキーフ中学校
- 10/9(火) ☆マディソン地域工科大学
☆テレビ出演(Live at Five/WISC TV)
- 10/10(水) ☆ビューカウティ小学校
☆フォークローヴィレッジ(民俗資料館)



ファーマーズマーケットでの熱演



大勢の観衆を前にバチさばきにも力が入る



マディソン地域工科大学での演奏



太鼓の演奏を食い入るように見つめる子ども達
(民俗資料館にて)

バイオマスに関する交流

地球温暖化対策の一つとしてバイオエタノールが注目されています。 Wisconsin 大学マディソン校では、米国連邦政府及び州政府から補助金を受けて、大学内にこれから 3 大研究センターの一つとして Great Lake Bioenergy Research Center を設置し、セルロース系バイオマス(草や木)を原料としたバイオエタノールの製造技術を開発することになりました。この動きを、直接担当している大学関係者からお聞きして、今後、千葉県でのバイオマス利活用への参考資料を収集してきました。

また、この研究センターに参画する企業の取組状況や、既にトウモロコシを原料としてバイオエタノールを製造している工場を視察したほか、畜産糞尿からメタンガスを発生させ、発電に利用している牧場や、パルプ工場廃水からメタン醗酵により、メタンガスを取り出し、発電している工場を視察してきました。(事務局:森山茂男)

バイオマスグループ

岡田 望	千葉県環境生活部資源循環推進課 バイオマスプロジェクトチーム
熊谷 直行	千葉県環境生活部環境政策課 温暖化対策室
中村 真人	山田バイオマスプラントチーム
森山 茂男	千葉 Wisconsin 協会

視察先

10/8(月)	Patrick Eagan 教授(Wisconsin 大学マディソン校) 中村団員によるプレゼンテーション
	C5-6 Technologies 耐熱性酵素によるバイオエタノール生産技術開発 (Middleton: マディソンから北西方向に約15Km)
	Kenneth Shapiro 教授(Wisconsin 大学マディソン校) 大学での知的財産の技術移転の枠組み
10/9(火)	Timothy Donohue 教授(Wisconsin 大学マディソン校) Great Lake Bioenergy Research Center におけるセルロース系バイオマス原料とするバイオエタノール研究開発の進め方について
	Heidi Zoerb 氏(Office of Corporate Relations) 企業化支援組織とバイオエタノールの取り組み(マディソン)
	USDA Forest Product Lab. 木質バイオマスの利活用技術研究施設の視察と、中村団員によるプレゼンテーション(マディソン)
	Madison Area Technical College 教育用バイオディーゼル燃料製造施設(マディソン)
10/10(水)	Renew Energy トウモロコシ原料によるバイオエタノール工場 (Jefferson: マディソンから東方に約50Km)
	Quantum Dairy 畜産糞尿のメタン醗酵処理によるガス発電の取り組み (Weyauwega: マディソンから北北東方向に約140Km)
	Packing Corporation of America ダンボール工場における排水のメタン醗酵処理によるガス発電の取り組み (Tomahawk: マディソンから北方向に約280Km)



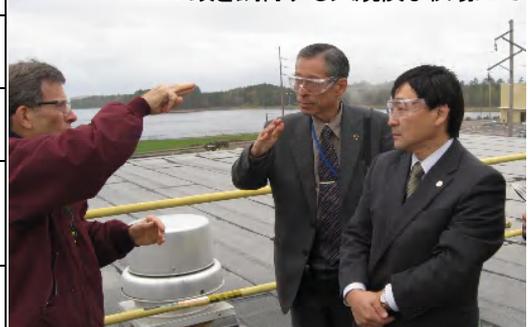
Wisconsin 大学の Timothy Donohue 教授



トウモロコシからバイオエタノールを製造する工場



1800 頭を飼育する大規模な牧場にて



製紙工場の排水処理施設にて

学術・教育分野の交流

今回は、神田外語大学とマディソン地域工科大学（MATC）との学校間協定調印式がメインでした。神田外語大学からは、船倉氏が友好使節団員として参加し、長田氏は調印式のための参加となりました。

調印式前日に、同大学の国際教育コーディネーター・ブラッドショウ氏と英語学部職員パーネル氏から、大学全般と授業に関するオリエンテーションが行われ、調印式の打合せ及び大学施設と授業見学を行いました。翌日の調印式は、来賓挨拶の後、協定書のサイン、プレゼントの交換、写真撮影の順で、無事に執り行われました。協定の内容は、双方の大学同士が友好関係を深め、お互いに協力していこうというもので、学生交換が中心となります。

その他、学生寮の候補の一つや幼・小・中学校、教育省の視察等を行いました。（事務局：笹原真哉）



学術・教育グループ

長田 厚樹	神田外語大学執行役員 (調印式のための参加)
船倉 美穂	神田外語大学国際交流課主任
笹原 真哉	千葉ウイスコンシン協会

NEW! 精神科医療分野の交流

精神科医療グループは、千葉県精神科医療センターのセンター長・浅野誠をリーダーとする5名のチームで、10月8日(月)から11日(木)までの4日間、マディソン市を中心としたデー郡の精神医療施設及びNGOなど民間ボランティアグループが運営する支援施設を精力的に訪問し、知見を深めました。

訪問先は、メンドータ州立精神病院、同病院施設内にあるベトナム・モン族のための精神医療の家「カシアハウス」、精神保健地域ケアシステムの民間団体「PACT」(Program of Assertive Community Treatment)、精神的ケアを必要とする人々のための授産施設「ヤハラハウス」、緊急避難的宿泊施設「クリサリス」など、「マディソンモデル」に係る諸処の精神医療施設を訪問しました。（事務局：阿部照夫）



本県を訪問したこともあるディヴィット・ルコント博士と



ベトナム・モン族の人たちと

視察先

10/8(月)	カシアハウス ベトナム・モン族専用の精神医療の家 メンドータ州立精神病院 デー郡の中心的な精神医療病院兼研究所
10/9(火)	PACT (Program of Assertive Community Treatment) 精神障害者を地域社会の中で包括的に支援する民間団体 ホームレスの宿 教会の地下室を利用して、ボランティアの人達が、ホームレスに食事とベッドの世話をしている
10/10(水)	DVR (Division of Vocational Rehabilitation) 仕事のチャンスを与えることで、精神的リハビリを目指す施設 ディヴィット・ルコント博士とのミーティング マディソン地域の精神医療構築の中心人物 ヤハラハウス 精神障害者のための授産の家
10/11(木)	メンタルヘルスセンター デー郡の精神障害者の窓口となる施設 クリサリス 精神障害者の緊急避難的宿泊施設

精神科医療グループ

浅野 誠	千葉県精神科医療センター センター長
渡邊 好江	千葉県精神科医療センター 副看護部長
清水 千春	千葉県精神科医療センター 看護師長
千葉 信子	千葉県精神科医療センター 主任看護師
阿部 照夫	千葉ウイスコンシン協会

千葉県・ウィスコンシン州 生徒交流事業

今年度から、県教育委員会の新規事業として、千葉県とウィスコンシン州の高校生との相互交流がスタートしました。千葉女子高校、匝瑳高校の生徒がマントワック市のリンカーン高校へ、また松戸国際高校の生徒がオークレア市のフォールクリーク高校へ派遣され、現地校での授業への参加や校外学習等を通じて有意義な国際交流が図られました。来年度は派遣に加え、ウィスコンシン州からの高校生受入れも実施予定とのことです。

【派遣期間】平成19年9月29日～10月13日 【参加人員】生徒15名、引率教員3名

ウィスコンシン州への派遣を終えて

松戸国際高校 1学年 佐藤 悠

「今回の留学を、旅行と勘違いするな、向こうの人々は客人だからといって日本のような待遇は、一切してくれない。」

「置き引きやスリに気をつける。」

今回の派遣に際して、事前事業を通して言われたことは、このような言葉でした。

僕たち松戸国際高校の4人は、1校のみフォールクリーク校へ派遣されることとなりました。

フォールクリーク校は、日本で言う小学校から高校までの教育を行っている学校で、生徒のほとんどがお互いの顔を幼いころから知っているという素晴らしい学校です。今回僕たちをサポートして下さったのは、この学校で日本語を教えているペギー・ハグマン先生という方でした。

すべての環境の異なるこの地で、驚きや発見が山ほどありました。

普通日本人が持つアメリカの生活、これもなかなか違うようでした。一番驚いたのは、家の中では靴をぬぐことでした。家に着くやいなや、靴はぬいでしまうのです。やはりその方が楽だとか。

この地のような田舎では、何よりも、人々の関係に目を引かれました。家が何軒も並ぶ所は少ないわけですから、子供達が集まって遊ぶことができません。そのため一人で遊ぶことが多く、家族との信頼関係が強いのです。また近所の人も生まれた時から知っているような仲なのです。

人間関係に何かと問題の多い都会人を生きている自分たちに欠けていたのは、こういった人と人とのつながりなのかもしれません。そう感じさせられたのが、一番の印象でした。

留学という意味を語学の勉強という意味で考えてしまう人は多いと思います。けれど、それは大きな間違いです。



(右端が佐藤くん)

今回の派遣で感じさせられたのは、歴史や人種の異なる人々がどんな生活をしているのか、それを知る上で、都会で生きる自分たちへの疑問でした。

人はよく「田舎に住みたい。」と言います。それを本当の意味を実感させられた気がします。

このような素晴らしい体験ができたことに心から感謝するとともに、誇りを持ちたいと思います。

ピンチはチャンス

匝瑳高校 今泉奈津季



アメリカでもっとも実感したことは、言葉の壁である。私のホストファミリーはアジア系の家庭で、ホストマザーは英語を話せなかった。彼女以外の家族が私と話すときには英語を使うが、家族同士の英語ではない会話が隣の部屋から聞こえてくる時ほど辛い時間はなかった。

だがその反面、言葉だ(後列右から2番目が今泉さん)けが意思を伝える手段ではないということも実感した。泣けば悲しい、笑えば楽しい。表情だけでも少なくとも意思疎通はできるのだと思った。

日本とアメリカの最大の違いは、人との関わり方だと思う。下をむいて謙遜しながら話す日本人に比べて、相手の目を見て自分の意見をはっきり伝えるアメリカ人。はじめはイエス、ノーだけしか答えられなかったが、だんだん意見を言えるようになった。同時に敬語やお辞儀といった日本の文化は、とても素晴らしいものだ改めて思った。

この2週間で、自分自身とても成長できたと思う。英語力はもちろん、考え方も変わったし、何よりも自分にとって「ピンチはチャンス」という言葉がぴったりの2週間だった。本当に貴重な体験ができたことを家族、友達、さらにたくさんの人達に感謝したい。そしてこの経験を無駄にしないよう、これからの生活に活かしていきたいと思う。

～ウィスコンシン州・現地だより～

今後の国際交流について

ウィスコンシン千葉委員会 理事 宮崎 久 氏

ドッジビル市の民族伝承会館での公演が終わった瞬間、全員が総立ちとなり、大きな拍手が巻きおこりました。「銚子はね太鼓」の最終公演が無事に終わった時です。館長のミラー氏ががっかり笑って、「おめでとう、素晴らしかった。」と握手をして下さった。万雷の大拍手は会場にこだまして、しばし鳴り止みませんでした。



今回の和太鼓は少人数でしたが、今までマディソン市に来た太鼓グループの中で内容的に一番素晴らしかったと思います。団長の宮崎義政さんの人選が良かったし、選曲と進行が見事でした。聴衆全員参加形式や、学校では先生方まで生徒の前でリズムを取ったりして楽しく大いに盛り上がりました。最終公演の時などでは、最初に米国の国歌を横笛で吹き、途中でクリスマスの一曲を太鼓で演じ、日本の和太鼓とアメリカのメロディーが見事に融合しました。1回は広場でしたが、あと全部は屋内での公演でしたから、力強い太鼓の音が会場内で反響し、強い感銘を聴衆に与えることが出来ました。

響し、強い感銘を聴衆に与えることが出来ました。

本年は学術の分野で神田外語大学とマディソン地域工科大学との学術提携の調印式を10月9日に行いました。その提携を記念して大学の大講堂で和太鼓の公演をしたわけです。近くの小中学校から生徒も招待し、850人の人達が和太鼓の演奏を聴きました。全部で6カ所の会場で公演したので、約2,960名余りの聴衆が楽しんでくださったことになります。新聞では大学間調印式と写真入りの太鼓の紹介記事が一面に出て、次いでテレビでは実演で「銚子はね太鼓」の紹介をしてくれましたので、強くマディソン市民に印象付けることができました。最近では日本に関するスバラシイ・ニュースが全くありません。今や中国ブームになった感がいたします。使節団の皆様の活躍で日本のPRに大いに貢献できたと思います。有難うございました。

一昨年は生命工学の分野で合弁会社の設立。昨年は千葉大学とウィスコンシン大学ミルウォーキー校との学術提携成立。本年は神田外語大学と州立工業大学との提携成立などと橋渡しの大役を果たして参りました。このように千葉県・ウィスコンシン州にとってプラスになるような、時代にマッチした案件を見つけて、成果主義を目標に実績を積み上げて国際交流を続ければ、私達の将来は大きく展開していくものと確信しております。

今後の進展が楽しみです。



【編集後記】 千葉ウィスコンシン協会としては2度目の派遣となる「千葉県友好使節団」の派遣特別号を作成しました。編集作業を進めながら、皆さんの写真を見ると、どれもこれもいい顔ばかり！ ウィスコンシンでの交流が充実していたかを写真が如実に物語っています。あ～、私もウィスコンシン州に行きたい… (Nao)

発行所: 千葉ウィスコンシン協会

発行人: 森山茂男 編集人: 榎田直美

<http://www.chiba-wisconsin.jp/>

〒261-7114 千葉市美浜区中瀬2-6 WBG マリブイースト14階
(財)ちば国際コンベンションビューロー内

*電話でのお問い合わせ 043-223-2436(千葉県政策推進室)